特集

民俗芸能と郷土芸能

―民俗芸能の保存継承をめぐって―

文化財保護審議会専門委員
植木行宣

1.

1991年の夏、鹿踊を中心に130余の芸能が一堂に集まるというううたい文句に惹かれ、友人５人と“北上まつり”へ出かけた。関西に住む者には東北はやはり遠く、足繁くは通えない土地である。鹿踊や田植踊・ケンバイをまとめて見る絶好の機会と思われ、準備をととのえ、心はずむ思いでその日を待ったことである。

滞在わずか３日間。実質1日半の見物ではおのずから見る数は限られる。効率的に要領よくとスケジュールを組んではみたが、当然ながら細切れでは、見えるものも見えないのである。結果は惨憺たるものであり、最後は鹿踊とケンバイのいくつかにしぼって、やっと少々の結果をえる始末であった。研究者根性の浅ましさを改めて思い知らされたことだが、そこで民俗芸能をめぐる現代的問題を突きつけられもしたのである。

遠来の者ということでその時たまたま、地元のテレビ取材につかまった。感想を問われるままに田植踊の「門付け」というあり方にふれたところ、逆に問い返され驚いた。私どもの常識では、門付けはプロないしセミプロ的な外来の芸能者の行為である。地域住民による民俗芸能が祭りの領域の外に出て門付けすることはない。それがここでは常態なのである。ついそれが口に出たのであった。

文字では承知していた民俗芸能のあり方にみる東西の違い。門付けはそれを実感としてつきつけてきたのだが、いま一つの事柄がそれにダメをおした。まつりに参加した集団の多くがいわばクラブ的だという事実である。

基礎的なことがらを確認するため、例によってヒヤリングを試みるがどうにもピントが合ってくれない。どうして？。聞く相手が地域に根ざす祭り集団ではないからだと思い至るにはしばらく時間を要した。出演団体の過半は市民的有志の集まりであり、祭り集団だと無意識に前提する私の質問がかみ合うわけはないのである。130余はそうした団体を含む数にほかならず、しかもそれが次々に生まれ、まつりの活力ともなっているらしいのである。それらの団体の自己紹介によると、どこそこの芸能大会やイベントに何回出演したかが誇らしく語られ、その際のものらしい旗がステージを飾る。それは、そうした経歴がまつりへの参加資格でもあるかと思われるほどであった。過半の団体にとって、招かれ参加するそうした舞台こそが芸能継続の基盤となっており、そのことに何の違和感も存在しないのであった。

本拠をもたぬ新しい民俗芸能を生み出すこうした状況は、その芸能が現代に生きている証しでもあろう。しかしまた、神楽団が村里の祭りに巡回客演する習わしや門付けを常態とするこの地方の民俗芸能のあり方が、それを生み出す背景になっているとも考えられよう。

演じるところはともに鹿踊でありケンバイである。芸態も伝統的な集団のそれと見た目には大差はない。云われるように、新団体のものもやはり民俗芸能なのであろう。だとすれば、ここには伝統的な地域社会にもその行祭事にも無縁の民俗芸能が生まれ活動しているわけであり、民俗芸能の世界でかって見ることのなかった光景が展開しているのである。そしてその光景は、現在当面している民俗芸能の諸問題を先取りしてみせたものであり、そこには民俗芸能の一つの未来像が提示されていたと、今にして思われるのである。

2.

北上まつりも地域振興を目指すイベントであり、各地に盛行する町興し村興しの先頭に立つものである。そうした催しにおいて、民俗芸能の多くは、人寄せを目的に便宜使いされているのが現状であろう。それは使い捨てと言い換えてもよい。北上まつりの場合も、出演団体を芸能パレードという異質のパフォーマンスに巻き込みもしている。同じ傾向をもつわけだが、その芸能はただ招かれたからというのではなく、自らそれを楽しむ主体的な参加集団で構成されるところに大きな違いをみせる。そのあり方は沖縄の青年たちが生き生きと繰り広げるエイサー祭にも通じ、あいまって民俗芸能の将来を示唆するのである。

民俗芸能を生き生きさせるもの、私はそれを、広く裏方をも含めた“芸能する悦び”と称している。芸能する悦びを本質とするものは、感性にしたがって変化して止まないのであり、エイサーはまさしくそうした芸能なのである。

北上のクラブ的団体のそれは民俗芸能にもとづく。本来のものと見た目に大差はないが、それは取捨選択され新しい演出も加えて、演者の心に響きあう芸能に仕立てられているのである。そしてその芸能の悦びを共有する目的で結ばれた集団がまつりを賑わしているのである。それらの団体のケンバイはその結社特有のケンバイなのであり、本来の民俗芸能と同一ではない。それは民俗芸能が秘める現代性をとらえ直した新しい郷土芸能というべきものであり、伝来の民俗的な枠組みとは無縁の、芸能そのものを観客に問う存在となっているのである。

そのことは、審査員の一人としてたまたま参加の機会を得た去夏の全国高等学校総合文化祭（郷土芸能部門）においても実感させられた。出演芸能の五分の二に及ぶ創作太鼓を別にすると、あとはすべて民俗芸能ないしそれを舞台向きに再構成した民俗的芸能であったが、若者らしい演技を繰り広げた。全体的感想は別に記したのでそれにゆずりたいが（「郷土の芸能文化と高校生」奈良新聞平成９年11月７日号）、評価を集めたのは、民俗芸能も含めて、見せるためによく練られた構成・演出をもち、鍛えた演技で芸能する悦びを演じて見せるものであった。

舞台で演じるということは、民俗芸能であっても単に公開するということではなく、郷土芸能として公演することにほかならない。それが成果を上げるか否かは、演者・観客と響き合う現代性にかかっているといってよいのである。

そのことと合せて、これらの郷土芸能はいま一つ、民俗の場で失われつつある芸能の花を思い出させてくれた。

考えてみれば、民俗芸能の主要な担い手は若者たちであった。その芸能は疲れを知らぬエネルギーに満ちあふれ、時には羽目をはずしながら、新風をも取り込んできたのである。

高校生はまさにその年頃に当る。民俗芸能が備えた活力と魅力が彼等の芸能に受け継がれ、生気にあふれ艶やかな花を咲かせて当然なのである。生きた民俗芸能の継承はむしろこちらが本流で、伝承の可否は、民俗芸能が郷土芸能として位置づけられるか否かにかかっているように思われるのである。

問題は、そのような芸能的展開がすべての民俗芸能に通用するわけではなことである。そうした可能性のない場合はどうするのか。そしていま一つ、郷土芸能化によって起こるであろう民俗の切り捨てにどう対処するかにある。換言すれば、どうあっても守り継承しなければならないものは何かを究明しなければならぬということである。ところがその肝心の、何を守り、どういう部分は変化してもよいのか、あるいはその方法は、が明らかにしがたく、研究も残念ながらほとんど進展をみせていないのである。

3.

民俗芸能はいま確実に変容している。行うべき時日が変えられ、担い手が変化し、地域社会からの切り離しが強まって、芸能の揺れはますます大きくなっている。

京都を代表するある風流踊りは、昨年ついに近くの日曜日へと日時を変えた。休日でなければ踊り子の青年が揃わないこと、会社を休んででも勤めねばならぬとする地域的規制が薄れ、強制すれば物心にわたる補償を求めるといったことが主因である。もともと雨乞い御礼の芸能を祭礼に復活したものであり、祭日変更による直接の影響はない。しかし、サラリーマン化による体力の劣化、それを補うはずの気力が衰退しており、特別視されてきた重要曲目が肉体的消耗の激しさ故に忌避され廃れる事態がすすんでいる。

それでもこの地は通勤圏内にあり要員は充足できる。過疎がすすんだ丹後などではそうはいかない。たとえば太刀振は青年不足で、幼少年や熟年者が担い手となってようやく継承するところが目立つ。幸い太刀を振り踊るその芸能が幼少年を惹きつける力をもち、青年に拘らなければ廃絶は避けられる。だがそれで青年の芸能を代行するには限界がある。形式や振りは伝えられても、特有の勢いや花のある芸の継承は難しい。変容は必至といわねばならないのである。

鶴ヶ岡の太刀振（京都府美山町）

さらに担い手の変更が変質に直結するものもある。長浜の曳山狂言は子供の歌舞伎狂言で名高い民俗芸能の雄である。役者は幼稚園児から小学校初年の男子と決まっており、山組の町内から選ばれてきた。それが少子化の進行などで適齢児が不足し、他所からの「借り役者」とする場合が増えている。そこまではとくに問題はない。では女児を加えるのはどうか。タブーがなくなるだけでそれも問題はあるまい。しかしそれが大人に変われば、それは変質であり、伝承の意味すらなくなるであろう。

そうした変容に加えて、さらに重要な次のような問題も生じている。

民俗芸能は行祭事の一部として伝わるものであり、行祭事は幼少年から古老まで関係者の役割に応じた取り組みの総体である。芸能はその中で、時々の有資格者のバトンタッチによって継承されるのが基本形態であった。つまり演者は一過性的であったのだが、生涯を通じて行祭事の運営にかかわり、そのことで次の世代を育て、アイデンティティーをも見出してきたのである。芸能はそこでは単なる芸能に終始するのではない。それは人を育て、人と人をつないで、住み良い地域をつくるという役割をも担ってきたのである。

長浜の曳山祭りの場合は、年齢と地位に応じた役が決められている。山組の人々は古老に至るまでそれを順に勤めることで成長し、一人前となり、そうして育つ後継者に後を譲ることで、今日にそれを伝承したのである。歌舞伎狂言はいうならばその出発点である。幼少時に親からはなれ、他人の厳しい指導を受け、心身のプレッシャーの克服して大役を果たした体験は、何にも替えられぬ生涯の糧となるのである。その機能にこそ民俗文化としての芸能特有の意義があるといってよいのである。

その芸能を一部の人の手に委ねる傾向が強まっている。一人歩きする芸能保存会が増えているのはその現れにほかならない。そのはじめ保存会は文化財指定等の受け皿として便宜的に使われだした名だけのものであった。その保存会が地域組織から切り離され、受託団体から保存継承の責任団体に変化しているのである。行祭事を運営する側と芸能を演じる側との分裂が同じ地域社会において進んでおり、各種イベントへの出演がそれに拍車をかけているのである。その一方で民俗としての社会的機能は置き去られつつあり、それとともに芸能も生色を失っている。地方色のみのただ珍しいそんな芸能に伝承に価するどれほどの意味があるであろうか。

4.

民俗芸能には、京都の六斎念仏、祇園囃子、関東圏の祭り囃子といった観賞芸能としても十分通用する高度な芸能性を備えたものがある。それらは講などの芸団的組織をもち、時をかけ習熟した芸を備え、状況に応じて芸能を演じいつでも復元できる能力を保持している。そしてすでにその足場を市民的なものに置き換えており、現代に生きる芸能となっている。

問題は現代の芸能として自立が困難なもの、芸能だけ取り出せば伝承の意味がなくなる民俗芸能をどう考えるかである。最善を尽くした記録による保存を講じることは勿論だが、崩壊にむかっている地域の暮らしに民俗芸能がどうしたら有効に機能するのかをいま一度見直すことが重要である。

稽古仕上げ直前の長浜曳山狂言（長浜市教育委員会提供）

芸能は体得する文化である。五感を動員し体得すること、それは人を育てる大事な機能をもち、地域が保持した教育力の重要な一環であった。現代は郷土喪失の時代という。地域の教育力が消え知育偏重の歪みが心の荒廃となって吹き出している。民俗芸能の見直しは地域社会とその教育力の再生につながる試みでもある。民俗芸能の保存継承はその取り組みから始まるというべきであろう。